

Masaki Suda



——高校時代は教員志望だったそうですね。

数学の教員になりたいと思つていました。「謎解き感」が好きだったんです。例えば方程式は、分からないものを「X」と仮定し、計算を進めると自然に答えが導き出されますよね。それがロマンチックで、面白いなって。パズル感覚で毎日問題を解き続けていました。

そんな中、数学が苦手な友達に問題の解き方を教えたら、テストの点数が95点に跳ね上がったんです。「教える楽しさ」に気づいたのも、教員を志した理由の一つです。

表紙の人インタビュー

教員を志した高校時代主演ドラマで夢を実現

俳優、歌手 菅田将暉さん

——2019年に主演ドラマで教員役を演じられました。

高校2年の時、「仮面ライダーW」への主演が決まって俳優の道に進みましたが、思わぬ形で夢が叶いました。

役作りの参考に、小学校教員の親友に話を聞くと、初担任の際に先輩から受けたアドバイスを教えてくれました。

「始業式後の3日間で、ど

んなクラスにしたいか思いを語れ。そこで1年が決まる」。

撮影2日目の朝、早速、緊急の「ホームルーム」を開き、「もうちょっと締まっていきたい」と語りました。それ以降、現場がグッと引き締まったのを実感しました。

——仕事をする上で、戸惑ったり悩んだりすることは？

数学には必ず「正解」がありますが、お芝居にはありません。「このシーンはこんな風に」という「お題」はあっても、それをそのままやったら負けで、離れすぎても負け。大喜利のような感じですよ（笑）。いかに個性を出し、「自分らしく」表現できるかを常に心がけています。

俳優の仕事は、衣装や脚本があつて、監督がいる中で、100を200や300にするのが仕事。一方で、音楽活動では、0から1を生み出す「プロデュース側」の経験をしました。戸惑いもあります。同時に、それぞれ異なる役割が求められることにやりがいも感じています。

——ナレーションを担当した学校現場の実情を伝えるドキュメンタリー番組が話題になりました。

番組の放送後、全国各地の学校関係者から熱い思いのこもったお手紙をたくさんいただきました。教員歴30年という方からは、「長年とりにくってきた教育現場の課題を取り上げてくれて嬉しかった」と。この番組では「給特法」を扱ったのですが、成り立ちを調べて元々は先生へのリスベクトから生まれた法律だと知りました。それが今、時代が変わり、かえって息苦しい状況を生みだしていることも。

先生たちには、とにかく日々笑っていてもらいたいです。子どもにとつて、社会で最初に出会うおとなが先生ですから、その影響は大きいと思います。

Profile

1993年大阪府生まれ。2009年に『仮面ライダーW』でデビュー。18年に日本アカデミー賞最優秀主演男優賞を受賞。17年にソロ歌手デビューし、19年NHK紅白歌合戦に出場した。公開待機作として、「糸」、「キネマの神様」、「花束みたいな恋をした」がある。